

フリーカメラマン 海野 健朗氏



一台のカメラが転機に

1953（昭和28）年長野市に生まれた海野氏は、小学生のころから、本の説明を見ながらせっけんやマツチをひとりで作ってしまおうような手先の器用な少年だった。進学した建築学科では、課題として模型を作成することが多かったが、ここでもその特技が遺憾なく発揮された。しかし、親から譲り受けた一台のカメラが海野青年の人生を決めることになる。「作った模型の写真を撮るためにあれこれ写真に凝るうち、カメラマンになりたい、という気持ちが強くなっていったんです」。

ジョ入りして準備し、後片付けも行う。帰りはほとんど終電だった。「帰りの電車は場末のホステスや警備員などいつも同じ顔ぶれでした。奇妙な親近感がありましたね」と笑う。2カ月休みなしで働いたこともあった。深夜に帰宅して、布団にたどり着くまでに鴨居で倒れこんで眠ってしまい、朝起きたら顔にレールのような跡がくつきり…なんてことも。「1年経ったら、当初入社した人数は半分に残っていました。体力があることはもちろん大切だけど、なによりやる気があるかどうか。それでもやりたい人だけが残っていきましたね」と駆出し時代を振り返る。

わからなくなってしまうたこともある」と打ち明ける海野氏。「被写体をカボチャだと思って、どう料理してやるのかと考え撮影に臨むようになりましたけどね」と笑った。ときにはハッターリも必要だ。「オドオドしてはダメ。大物政治家にも自分から「やあやあ」と「うちから挨拶しにいこう」という度胸をつけなくては」。華やかな舞台の裏では…

て撮影を拒否されたことも一度や二度ならず。「女優さんたちは顔にプライドを持っていきますからね」。被写体のご機嫌を損ねず、美しく仕上げるのも仕事のうちだ。外国人を撮影することもある。最近ではビル・ゲイツや、ロシアの音楽家などを撮影している。「語学できません、出張いけません」じゃ仕事になりません。英語を学生時代に一生懸命やっておいたことが役に立っています。学生諸君、時間のある、今のうちに勉強しておこう！入学当時は特待生を目指して勉強に励んだという海野氏。当時は、特待生向けの学生寮が川越にあり、体育会系の厳しい規律が敷かれていたという。「女装趣味の学生、けんかっぱやい奴」と個性的な面々がいましたね。居心地がよく楽しかったです」と振り返る。

その道で五本指目指せ
フリーとしてやっていくには「並みじゃダメ。その道で五本指に入るくらいでなければ。自分の得意分野だけは絶対ナンバー1を目指せということでしょう」。

そんな海野氏にとってカメラマン冥利に尽きるのは、「仕上がりがいかにできてスポンサーに喜んでもらえるとき」。ときには被写体から褒めの言葉をもらうこともあるという。「なにかひとつ「これだ」というものを見つけてがむしゅらにそれに向かつて頑張ることです。まず体力！そして何よりやる気ですね」。さらに、大切なこととして、「恥をかくことを恐れるな」ということです。恥をかいてみて、じゃあ、自分はどうしたいのかが見えてくる。そこではじめてアドバイスがもらえるよつになります」と語ってくれた。

その後立木事務所のアシスタントを経て2年後に独立し、自身の事務所を設立した。

被写体はカボチャと思え

当初ファッション写真の分野を目指していたが、親しい編集者の配置換えに伴い、女性誌の担当になった。これまでに撮影した芸能人は数えきれない。本人いわく「松田聖子以前のほとんど全員」とか。ほかにも各国大使、著名な文化人、芸術家、政治家、財界人など枚挙にいとまがない。フリーになった当初は、大物相手に「アガってしまっって何を撮っているのか

好々爺に変貌してしまった、というある大物政治家を例に挙げ、「図々しくて、大胆で『狡猾』という言葉がびつたりだけど、政治家はほんとに魅力的な人が多いですね。男として一番魅力を感じますよ」と語ってくれた。

女優さんの撮影裏話も気になるところだ。いつも同じ笑い方じゃない、というある有名女優さんの話になった。どの角度で撮ってもいつも同じ表情になってしまおうという。「この笑い方が一番」というポリシーがあるらしい。また、別の女優さんは顔の片側だけしか撮らせてくれないという。「肌の調子が冴えないから」と直前になっ

昭和51年当時、オイルショックで景気は低迷し、就職難だった。「不況のときこそチャンス。思い切ったことができる」。そして写真家を目指して麻布スタジオに入社した。「それまで、写真のことも何もわからない門外漢でしたが、『もう逃げ場がない』と思っただけでがんばりましたよ」。

無我夢中の駆出し時代

当時の写真界は徒弟制度が根強く残っていた時代で「アシスタントは人間にあらず」が定説。「歩くな、座るな」と常に求められるのは全力疾走だったといふ。早朝は誰よりも早くスタ